かつて音楽は理数系科目だった

音楽は宇宙とつながっている!?

さまざまなメディアを通じて、私たちが毎日のように触れている音楽。人類はいつ音楽と出会い、そしてどのように発展してきたのだろうか。歴史を紐解いていくと、そこには壮大なドラマが隠されているようだ。音楽の歴史と科学の関係について沖野成紀さんに綴ってもらった。

東海大学大学院芸術学研究科長・教授

沖野成紀

●おきの・しげき　1960年兵庫県生まれ。東京大学基礎科学科卒業、同大学院人文科学研究科博士課程満退。専門は哲学的音楽美学から実験音楽美学へとシフト。論文はインターネット上で閲覧可。共訳『古楽の音律』（春秋社）、『音楽の社会心理学』（東海大学出版会）など。

音楽と「音楽」の始まり

音楽の始まりはどのようなものだったのでしょう。音声言語同様、音は消え去るのみで、遺物として残りません。今まで音楽の起源として、言語、信号、労働、模倣、求愛、呪術等いろんな説が考えられてきましたが、直接検証することはできません。

例えば、何らかの呪術や儀式において、ラスコーやアルタミラのような壁画が炎に照らされ揺れ動く中、なにがしかの音も利用され、それが音楽の起源となったと考えることは興味深いことです。しかし、壁画と違って、その時の音はもう何万年も前に消え去っていて、今では夢想するしかありません。

他方、音楽そのものでなく、「音楽」という概念の始まりはどうだったのでしょう。つまり、私たちはいつ頃から、音を人の注意を引くよう人為的に変化させるような活動を、「音楽」と呼ぶようになったのでしょうか。こちらの方は、音楽そのものとは違って、文字で書かれた資料が残っています。

まず今日、私たち日本人のいう「音楽」は、意外に思われるかもしれませんが、明治維新で日本に入ってきた英語の music（独語であれば Musik）の訳語として始まりました。実は、それ以前は「楽」の一文字で今いう音楽を表していたのです。

では、music の語源はどうか。それは古代ギリシアの「ムーシケー（μουσική）」にまで遡ります。でも、少なくとも初期のムーシケーは、決して「音楽」とは訳せないような表現行為でした。それは、もちろん音楽的要素も含んでいましたが、詩や演劇や踊りの要素も含んでいたからです。さしずめ、総合芸術といったところでしょうか。

確かに古代ギリシアのムーシケーは近代のオペラのモデルにもなりましたが、それはそれらの要素を総合したというよりは、未分化のまま分かち難く結びついた儀式由来の表現行為だったと考えられます。

当初は「コロス」（コーラスの語源）という集団の行う「コレイア」（コレオグラフィの語源）と呼ばれていたのですが、紀元前五世紀の詩人ピンダロスにおいて初めて、諸技芸の女神群ムーサイに因み、「ムーシケー」と呼ばれるようになります。

その後ムーシケーは、儀式的活動から完全に娯楽的活動へと変容していくうちに、音楽や文芸や演劇や舞踊に分かれていきました。その際、今でいう音楽が「ムーシケー」の名を引き継いだのです。この頃の楽譜で唯一完全なものとして、《セイキロスのスコリオン》が挙げられます。今ではインターネットで検索すれば、墓碑銘として刻まれた歌詞や文字譜の写真、演奏を簡単に見聞きすることができます。ただし、実際どのように演奏されていたかは想像まかせですが。

理数系科目としての「音楽」

ムーシケーがラテン語のムシカ（musica）に引き継がれた際、その意味は、基本的には「音楽」と訳せるものの、古代ギリシアとはまた違った方向に拡大していきます。

一つは、ムシカが、中世ヨーロッパの大学で学ばれた標準カリキュラムである七自由学科（septem artes liberales. 今日の大学の教養課程リベラル・アーツの語源）に組み込まれたことです。といっても、決して作曲や演奏が教えられていたわけではありません。では、何が教えられていたのでしょうか。

それは、もっぱら音律計算だったと考えられます。音律とは、ドレミファ……の各音の高さの厳密な決め